

[Notes and Communications]

第5回研究奨励賞受賞作講評

第5回経済学史学会研究奨励賞

本郷 亮『ピグーの思想と経済学——ケンブリッジの知的展開のなかで』

名古屋大学出版会，2007

第5回経済学史学会研究奨励賞の公募推薦（締め切り2007年10月31日）に応じて提出された作品は著書1点であった。なお今年度から規定を改め、前年度『経済学史研究』（48巻2号，49巻1号）で書評対象となった著作は、推薦がなくとも審査対象とすることになったが、該当する著作はなかった。審査委員会で慎重に審査した結果、上記著作を第5回の受賞作と決定した。第3回第4回に関しては研究奨励賞本賞の該当作がなかったから、3年ぶりの本賞受賞作の出現を喜びたい。また別の講評にあるように、『経済学史研究』論文賞も受賞作を決定した。

本郷氏の著書は、ケインズの「古典派」批判によって、またL.ロビンズの旧厚生経済学批判によって、経済学史上はその影を薄くしたアーサー・セシル・ピグー復権の研究である。ピグー復権は思想・理論・政策の総体において果たされる。この場合、全体としては思想面に力点が置かれ、理論面ではむしろ理論の枠組みに重点が置かれ、また政策面では主に理論の枠組みに関する限りでの分析が行われている。本書は、ケンブリッジ経済学の展開の中でマースシャル、ケインズと並ぶもう一人のビッグ・フィギュアの復権によって、現在研究の高揚が著しいケンブリッジ学派研究に対してインパクトを与えるものである。

本書の構成は以下である。「序」、第1章「人物」、第2章「初期ピグーの思想」、第3章「初期ピグーの経済学」、第4章「雇用理論（1）産業変動論」、第5章「ピグーの長期とケインズ

の短期」、第6章「厚生経済学とその周辺」、第7章「財政論」、第8章「雇用政策—ピグー神話」、第9章「雇用理論（2）賃金政策論」、終章「ピグーから眺めた〈ケインズ革命〉」、「むすび」。本書を貫く基本命題は、第一に、ピグーにおける厚生経済学とは人間性育成のための経済学であること、第二に、ピグーとケインズの対立は段階的で重層的な構造を持つこと、である。著者はこうした二つの命題を軸にして、同時代人ケインズの所説と対比しつつ初期からのピグーの所説を位置づけるという手法を取り、「ケインズ革命」の再評価を行おうとする。

著者によると、①ピグーは1908年以降失業対策としての公共事業を主張しており、その後ケンブリッジのなかで公共事業は定石的な政策論となり、1920年代には学界・政界の共有財産になっていた。②ケンブリッジにおける産業変動論は、短期かつ循環的な労働需要変動をいい、これがピグー厚生経済学の一つの源流をなす。なお、産業変動に対するピグーの基本的な対処法は、金融政策を第一とし、公共事業などによる労働需要管理は補完的なものであった。③『産業変動論』（1927年）に代表される、20年代不況での失業に対するピグーの認識は、産業変動（労働需要側）の結果ではなくて、労働運動高揚による新産業部門での高賃金の維持と旧産業部門からの余剰労働移動の困難（労働供給側）に原因があるというものである。④30年代恐慌期には、ピグーはケインズとともに、公共事業による需要刺激策を唱え、

賃金上昇傾向を懸念しつつ賃金カットに反対した。30年代における両者の政策上の対立は、賃金カットか公共事業かではない。自由貿易か保護かであった。⑤『失業の理論』(1933年)は、労働供給側の要因による長期的趨勢的な失業を分析するものであり、いわゆる自然失業率仮説に類するものである。ここから彼は、需要管理政策は短期的には有効だが、長期的には無効であると結論づけた。大恐慌という非常時に失業率を長期的に規定する労働供給側の要因を分析するという時事遊離は、賃金切下げ論者ピグーというレッテル貼りの余地を残したが、『失業の理論』は政策の書として書かれたものではなかった。⑥こうしてケインズ『一般理論』でのピグー批判は、「神話」と「わら人形」創出という一面を持つ。ピグーにはケインズ以前のケインジアンという側面が存在するのである。ピグーとケインズの対立は、両者がシジウィックとムーアからの哲学・倫理的な影響を受けながら、ムーア受容をめぐる対立——ケンブリッジ哲学の連続的發展を見るピグーと断続的の革命を見るケインズ——を基点として、功利主義の未来への適用と資本蓄積における人間のあり

方をめぐる対立——すなわち、シジウィック的な長期の視点に立つピグーとムーア的な短期の立場に立つケインズ、世代間正義の実現のために貯蓄重視を唱えるピグーと「似非道徳律」を批判して今を生きることを主張するケインズ——に展開していった。「ケインズ革命」は、こうした思想上の対立を根底に持つ「革命」であった。

本書は256点に及ぶピグーの著作目録をはじめ、随所に新たなファクトファインディングを含み、著者のピグーへの沈潜ぶりが余す所なく示されている。ピグーの伝記的部分に関しても魅力的な叙述になっている。ケインズ評価についての異論は十分予想されるし、著者のスタンスが余りにピグーに共感的であり、批判的吟味に欠けるという恨みは残るが、ピグーに経済学史上の正当な地位を与えるためには、まずはこのような著作が出現する必要があったというのが、審査委員会の一致した見解である。

2008年5月23日

経済学史学会
学会賞審査委員会